

# 韓国の小学校英語教育が日本へ示唆すること —公立小学校中学年の授業分析を中心として—

二五 義博

## Suggestions From Elementary School English Education of South Korea to Japan: Focusing on Class Analysis of Middle Grades in Public Elementary Schools

Yoshihiro NIGO

### 1. はじめに

韓国は、日本と比べて英語力が総じて高いと言われている。例えば、両国ともに年間で200万人以上が受験することから、両国の英語力の差を図る指標として信頼性が高いとされることの多いTOEICの得点を比較してみたい。2022年6月、国際ビジネスコミュニケーション協会(2022)が発表した2021年の世界におけるTOEIC<sup>®</sup> Listening & Reading Test (TOEIC<sup>®</sup> L & R)の得点結果によると、韓国の平均は679点(L 376点、R 304点)、日本の平均は574点(L 315点、R 259点)であった。

このTOEICの得点における100点以上もの差の原因を何か1つに求めることは難しいが、本稿ではその重要な要因の1つとして、両国における本格的な小学校英語教育のスタート時点の違い(とりわけ、小学校3・4年生の中学年)に着目したい。まず、日本においては、2020年の新しい学習指導要領の実施に伴い、全国の公立小学校の中学年に英語教育が初めて全面的に導入された。そして現在、グローバル化に対応した英語力習得の第一歩として、中学年という発達段階に合う英語活動をどうデザインするかが課題となっている。

一方で、同じアジアの国である韓国においては、国際化を促進する重要な手段として英語教育が早くから重要視されている。また、教育部による数千人規模のアンケート調査結果、英語を効果的に習得するには初等学校の児童が最適であるという判断が下され、1997年の第7次教育課程から小学校3学年で英語が導入され、6学年までの各学年で週当たり2時間英語を学ぶことが必修となった。それ以後は実態に合わせて英語の授業時間数の増減は見られたが、2012年の教育課程の改定以降は、裁量の時間などもあり学校によって異なるものの、小学校3~4学年で週2時間、5~6学年で週3時間ぐらい実施されているようである。一般的に言って、韓国の小学校英語教育の特徴は、英語での意思疎通に重点を置きつつ、「聞く」「話す」だけでなく「読む」「書く」についても早い段階から導入されている点であろう。

本研究の目的は、こういった韓国の英語教育政策や授業の特徴を踏まえつつ、1つの事例研究として、発表者が実際に視察した小学校の英語の授業分析を試み、本格的に始まったばかりの日本における小学校中学年の英語活動に対して示唆できる点を探ることである。

## 2. 日本の小学校英語教育政策

日本において、部分的に外国語教育（この場合、特に英語教育のこと）が可能となったのは、1998年に告示された学習指導要領によって、第3学年より「総合的な学習の時間」が新設された時であった。この授業時間数は、第3学年と第4学年が105時間、第5学年と第6学年が110時間と定められた。「総合的な学習の時間」では、児童が社会のさまざまな問題に対して体験的あるいは問題解決的な学習を行うのであるが、この中の「国際理解」と連動する形で外国語会話（特に、英語）を行うことが可能となったのである。具体的には、歌、ゲーム、クイズ、ごっこ遊びなど、身近で簡単な英語を聞いたり話したりする体験的な活動を中心とした、いわゆる「英語活動」が実施されたのである。しかしながら、これは各学校が裁量により「国際理解」の範囲内で英会話を取り入れているということであって、全国のすべての小学校が英語教育を一斉に行っているという訳ではなかった。小学校高学年について言うと、全国の公立小学校にて一律に英語学習が始まったのは、グローバル化に対応した英語力の向上や教育の機会均等の確保等の視点から、2008年に告示された学習指導要領によって、2011年以降のことであった。ただし、ここでの英語学習は児童の成績評価をするわけではないため、教科としてではなく活動型としての実施である。

2011年以降になると、これまでの英語活動の実施状況にも基づき、英語教育のさらなる「早期化」や「教科化」の必要性が議論されるようになった。まず、文部科学省（2013）は、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を2013年12月に公示した。ここでは、小・中・高を通じて一貫した学習到達目標を設定することにより、英語によるコミュニケーション能力を確実に養う計画が示された。この計画の趣旨に従い、小学校は2つの段階に分けられた。第1段階である中学年では、週1～2コマ程度の活動型（当時の高学年で行われていたもの）での実施をし、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標とし、学級担任を中心に指導することが提案された。また、第2段階である高学年では、週3コマ程度（モジュール授業も活用）の教科型での実施をし、初歩的な英語の運用能力の育成を目標とし、英語指導能力を備えた学級担任に加えて専科教員の積極的活用をすることが提案された。

次に翌年になると、文部科学省（2014）は、「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」を発表した。ここでは、これまでの小学校での取り組みにおいて、コミュニケーション能力の素地を養うという観点で、下記のように外国語活動を通じた成果が出ているとされた。

### 【文部科学省「小学校外国語活動実施状況調査（H24）」】

- 小学生の7割が「英語が好き」「英語の授業が好き」と回答。
- 中学生の8割が「小学校の英語の授業（簡単な英会話）が役に立った」と回答。
- 多くの中学校教員が「小学校の外国語活動導入前と比べて、生徒による英語の「聞く力」「話す力」が向上した」と回答。

一方、小学校の高学年では、抽象的な思考力が高まる段階であるにも関わらず、外国語活動の性質上、体系的な学習は行わないため、児童が学習内容に物足りなさを感じている状況が見られるとともに、中学校1年生の8割以上が「英語の単語・文を書くこと」をしておきたかったと回答していることから、中学校において音声から文字への移行が円滑に行われていない場合が見られることが分かった。

## 【文部科学省「小学校外国語活動実施状況調査（H24）」】

- 中学生の8割が「小学校の英語の授業で英単語を「読む」「書く」機会が欲しかった」と回答。

### 【小学校の事例】

- 低学年から外国語活動に取り組む小学校約3,000校（全体の約15%）における取組状況を見ると、小学校高学年で学習意欲が低下する傾向が見られる例もある。その場合、高学年で「読むこと」「書くこと」も含めて系統的に指導する教科型の外国語教育を導入することで、児童の外国語の表現力・理解力が深まり、学習意欲の向上が認められている。

これまでの実践を踏まえた上で、文部科学省（2014）は、小学校では中学年から「外国語活動」を開始し、音声に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養うことが必要とした。それと連結する形で、高学年では身近なことについて基本的な表現によって「聞く」「話す」に加え、積極的に「読む」「書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養うことが必要とされた。そのためには、学習の系統性を持たせる観点から、教科として外国語教育を行うことが適当なのである。より具体的には、小学校中学年への外国語活動の導入は、英語学習に対する動機付けや、聞き取り、発音の向上に効果があると考えられる。また音声を中心に体験的に理解を深めることは、高学年よりも、小学校中学年の児童の発達段階により適していると考えられるのである。その一方で、小学校高学年では、現在、中学校で学ばれている内容を単に前倒しするのではなく、小学校の発達段階に応じて、積極的に英語を読もうとしたり書こうとしたりする態度の育成を含めた初歩的な英語の運用能力を養う指導が考えられるのである。

以上の文部科学省の一連の計画や提言は、小学校英語教育の「早期化」や「教科化」、「高度化」や「本格化」への重要な動向として捉えられるであろう。こうした動きにより、特に中学年では韓国に大きな後れを取るようになったが、2017年に告示された小学校学習指導要領に基づき、2020年度からは全国の公立小学校3～6学年において英語学習が全面実施されるに至ったのである。より詳細に見ると、これまで高学年で実施されていた「外国語活動」（原則として英語）は、中学年にて年間35時間（1単位時間は45分）の実施をされることとなった。また、高学年においては、教科化された「外国語科」（原則として英語）が年間70時間実施されることとなったのである。

## 3. 韓国の小学校英語教育政策

### 1) 小学校英語必修化（1997年度～）へ至る過程

上記の日本の小学校英語教育政策と比較する形で、ここでは韓国の小学校英語教育が必修化へと至る過程やその背景を見ていきたい。韓国では、1982年度より、特別活動の一環として、短い時間（15分ほど）ではあるが、初めて英語が初等学校で教えられた。その後、1988年度からは、「裁量時間」を利用しながら、主に初等学校5・6年生を対象に英語教育が実施されることとなった。この流れを汲んで、1995年11月、韓国教育部は「初等学校英語科教育課程」を告示し、この告示は、1997年3月より全面実施された。これにより、韓国におけるすべての公立初等学校は、英語を週2時間（45分×2）、必修の授業科目として教え始めたのである。3学年より、年度ごとに学年進行で導入していく方式により、2000年以降は、3～6学年の全ての初等学校の児童が英語を正規の科目として学ぶこととなった。日本の場合と比較すると、小学校の中学年において全国規模で英語教育が導入されたのは、韓国の方が20年以上も早いことになる。ちなみに、

小学校3～6学年の4年間で学習する単語は約500語と決定された。

河合(2004)によると、韓国における小学校英語の必修化には2つの重要な背景があったとされている。1つは、金泳三大統領の政権下(1993-98)においては、加工貿易中心の工業化が原因の貿易赤字となっていたことと、深刻な科学技術者の不足に苦しんでいたことが挙げられる。後者では、アメリカが70万人、日本が50万人であるのに対し、韓国はわずか7万人であった。このような中、“創造性に満ちた科学技術者の養成が教育の最優先課題である”ことが強調されたが、貿易や科学の分野の成長に重要な手段でもある英語の必要性は高まっていたと言える。また、金泳三大統領は、1993年シアトルAPECへの出席の際に、“韓国の国際化の必要性と、アジア重視およびアジアで意思疎通を行う共通語は英語であると強く認識”したとしている。もう1つの小学校英語必修化の背景には、全国規模のアンケート調査の結果が挙げられる。これは、中学生・高校生、初等学校・中学校・高等学校教員、大学教員、英語教育専門家、保護者など約4,200人を対象として実施されたもので、その質問項目は「英語教育の目的」「言語機能別重要度」「能力別授業の必要性など」についてである。このアンケート結果、韓国教育部は、国際化・情報化の時代における英語の必要性を考慮し、英語を効果的に習得するには、初等学校の児童から開始するのが最適との判断を下して、1997年度より、全国の初等学校3年生より英語が導入されることになったのである。

必修化に伴う条件整備に関しても、韓国は日本に比べて充実していたと考えられる。現職教員に対する研修に関しては、日本では地方自治体が夏休みの数日を利用して行ったり、文部科学省の指導の下で各校1名の中核教員のみが研修を受けたりが一般的である。それに対して韓国では、山本(2015)によると、初等学校3年生からの必修化に際して、韓国の初等学校の教員(英語担当教員)については、120時間の英語研修が、全国12か所の教育研修センターにおいて実施された。例えば1996年度のソウル市教員研修センターの英語研修の場合、1997年度より初等学校第3学年の担任となる約3,200人の現職教員に対して、120時間の英語研修が行われた。また秋休みには、各初等学校の英語教育を総括する教員を1人ずつ約550人に対し、さらに120時間の深化研修が実施された。これらはその後も継続し、2002年度まででは毎年約3,000人規模の研修が行われた。研修内容は、教員の英語による意思疎通能力の向上と児童の発達に合わせた学習法の習得に重点が置かれ、英語教育のための教材や資料開発のためのスキル向上等も研修内容に盛り込まれた。全体の約7割の時間が英会話等の意思疎通能力に、残り約3割が英語教授法に充てられるという構成で行われた。前者の意思疎通能力に関する研修時間は、1996年には68時間であったが、97年には88時間に増えた。

必修化に伴う条件整備として、現職教員に対する研修のみならず、新たな英語教員の養成も行われた。とりわけ、初等学校の教員養成は、教育大学、韓国教員大学、梨花(イファ)女子大学で行われる。教育大学とは、初等学校の教員を養成する目的をもった4年制の国立大学のことで、11校設置されており、初等学校教員資格を保持している者の約95パーセントがこの教育大学卒業生であった。また、韓国教員大学とは、初等及び中等教育段階の教員養成を目指す、韓国教員大学設置令に基づく4年制の国立大学のことである。ここで重要なことは、小学校英語の必修化に伴って、教育部の指導の下、文学・英語学中心のカリキュラムから、意志伝達中心の英語教育のカリキュラムに大幅な変更が行われたことである。一例を挙げると、大邱(テグ)教育大学の場合には、初等教員養成課程の英語関連必修科目として、教養課程では英語Ⅱ(1年次4単位)と英語会話ⅠⅡ(2年次4単位)、専攻課程では英語科教育ⅠⅡ(4年次4単位)が新たに設置された。一方、小学校英語専科教員の要件として、大学3年次および4年次に取得すべき単位数は合計21単位であったが、その中に初等英語教授法(3単位)と初等英語教育論(2単位)が含まれた。即ち、新たな小学校英語教員の養成のため、コミュニケーションを中心とする英語能

力と小学校段階の英語教授法の両面において充実が図られたのである。

## 2) 必修化後の小学校英語教育政策

1997年度における小学校英語の必修化の後には、第7次教育課程（1997年12月告示）が2000年度より施行された。ここでは、初等学校英語の教育目標が「児童が日常生活において使用する基礎的な英語を理解し、表現する能力を育てる教科として、意志疎通の基礎となる言語機能能力、中でも音声言語教育が主となる。文字言語教育は、やさしく簡単な内容の文を読み、書くことのできる内容とし、音声言語と連携して内容を構成する」ことであると明確化された。また、中等学校との接続に関しては、「中等学校における英語教育は、初等学校で学んだ英語を土台として学生たちが現代の日常英語を理解し、これを使うことのできる能力を養い、国際社会と外国の文化を理解し、さらに我々の文化を発展させ、国力の成長に寄与できる言語的基礎を整えることに力点を置く」ことが言及され、英語教育における初等学校と中等学校の連携が重要視された。

第7次教育課程の施行に伴い、2001年度からは、初等学校の各学年に国定教科書が導入された。文部科学省（2005）の「韓国における小学校英語教育の現状と課題」に関する調査によれば、2005年度使用の国定教科書の場合、初等学校中学年に対しては、以下のような英語教科書の特徴が示された。

### ○初等学校3年生（本文：計92頁）

- ・「聞く」「話す」活動のみを取り扱っている。
- ・指示に関しては、タイトル（Look and Listen、Listen and Repeat、Let's Play など）のみ英語が使用されているが、詳細な指示は韓国語による。
- ・内容は、チャント、歌、ゲーム、ロールプレイなど。
- ・絵や数字のカードが巻末に添付されており、切り取って使えるようになっている。

### ○初等学校4年生（本文：計98頁）

- ・「聞く」「話す」活動を中心にしつつも、新たにアルファベットおよび基本単語を掲載。
- ・Let's Readにおいて、スポーツ名などの基本的名詞の「読み」を行う。
- ・絵カードが巻末に添付されており、切り取って使えるようになっている。

ここから分かることは、中学年では「聞く」「話す」の技能に焦点を当てており、とりわけ3年生では、歌やゲームといった体験的な英語学習の活動を多く取り入れている点である。英語学習の初期の段階ではあまり難しい内容の活動を取り入れると、英語を分からないと感じる児童が増えて英語嫌いが増える可能性もあるため、まずは英語を楽しく学ばせようという意図が読み取れる。その一方で、4年生になると、「聞く」「話す」のコミュニケーション活動が中心となりながらも、比較的早い段階から文字も導入し、アルファベットや基本単語を「読む」活動が一部取り入れられ、「聞く」「話す」の活動と並行して行われているのが特徴的である。加えて、「聞く」「話す」はすべて英語で行うことを意図しているのであろうが、教科書に書かれている文字に関しては全て英語という訳ではなく、理解を重視して母語も適度に使用されている点が重要である。

また、初等学校高学年に対しては、以下のような英語教科書の特徴が示された。

○初等学校5年生（本文：計136頁）

- ・ Let's Read、Let's Write の項で、基本単語の読む練習、書く練習を行う。
- ・ チャンツや歌においては、文を英語で表示している。
- ・ 単語レベルにとどまり、文までは発展させていない。
- ・ 絵カードが巻末に添付されており、切り取って使えるようになっている。

○初等学校6年生（本文：計136頁）

- ・ 文レベルを取り扱い、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を総合的指導。
- ・ 自己紹介文が読み書けるレベルまで取り扱っている。
- ・ 文法的には、日本の中学校2年生レベルまでの事項（例：現在形、未来形、過去形、不定詞、比較級等）を取り扱っている。
- ・ 絵や基本文のカードが巻末に添付されており、切り取って使えるようになっている。

ここから分かることは、初等学校中学年では「聞く」と「話す」が中心だったのに対し、初等学校高学年では基本単語を「読む」「書く」の活動が多く取り入れられている点である。ただし、5年生においては、チャンツや歌を除き、「読む」「書く」は文レベルではなく単語レベルで行うにとどまっている。それに対して、6年生においては、自己紹介文などの「読む」「書く」を文レベルで本格的に取り扱うようになり、同時に、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を総合的に指導することが目指されている点が特徴的である。文法に関してみると、韓国では、未来形や過去形、不定詞や比較級といったレベルの文法も2005年にはすでに小学校高学年で導入されている。これは、日本との英語力の差を考える意味でも、重要な事実の1つとなるであろう。

次に、2009年度には、改訂第7次教育課程（2007年2月告示）が施行された。ここでの初等学校英語の教育目標は、「英語への興味や関心を持って、日常生活で使用する基本的な英語を理解し、表現する能力を養う」ことであった。具体的には、ア. 英語に対する興味と基礎的な英語の使用に自信を持つ、イ. 日常生活で英語で基礎的なコミュニケーションを行うことができる能力を養う、ウ. 英語の学習を通して、他の国の習慣や文化を理解する、エ. 言語の機能を統合的に使用できる能力を育てるようにする、ことである。これらからは分かることは、韓国の小学校英語教育は、児童の興味・関心、日常生活と関わる英語使用、コミュニケーション、他国の文化理解、統合的な言語機能の活用を重視している点である。

さらにその2年後の2011年度からは、2009改訂教育課程（2009年12月告示）が施行された。同様に、ここでの初等学校英語の教育目標は、「小学校英語は、英語に対する興味と関心を持って、日常生活で使用される基本的な英語を理解し、表現する能力を養うことを目的とする」ことであった。具体的には、ア. 英語に対する興味と基礎的な英語を話すのに自信を持つ、イ. 日常生活では英語で基礎的なコミュニケーションができる能力を養う、ウ. 英語の学習を通して、他の国の習慣や文化を理解する、ことである。この2009改訂教育課程の実施に伴い、韓国における小学校英語教育はさらなる拡充強化の方向へと向かった。詳細には、2011年度以降、英語の時間は、小学校3・4年生では週当たり1時間、5・6年生では週当たり2時間となった。このこと自体では、表面上は時間数が減ったように見えるが、各校の実情に合わせ「裁量の時間」の枠組みで科目指導が可能となったため、事実上は時間数が増えたケースが多い。韓国の大多数の初等学校は、裁量時間も含めて3・4年生では2時間、5・6年生では3時間としていた。また、2012年度以降は、これまでの国定教科書に代わり、検定教科書が使用されることになり、ソウル特別市は「裁量の時間」を利用して、小学校1年生からの英語指導を開始したのである。その10年

後に、日本の公立小学校ではようやく3年生で英語指導を開始したばかりということ考慮に入れば、韓国の方が古くから早期の英語教育を充実させていたことが分かるであろう。

最後に、「2007改訂」(2009～)から「2009改訂」(2011～)への変更の背景に関して、ソウル特別市教育研究情報院(小学校課程)パンフレットより検討してみたい。同パンフレット(2009, pp. 4-5)によれば、小学校英語科教育課程の主な改正理由として以下の項目が挙げられている。

- 英語でのコミュニケーション能力は、個人の素養と同時に国家競争力の重要な要素
- 英語学習の成功の要因は、英語にさらされている時間、英語の使用頻度、学習の集中度と比例
- 週1～2時間では、学習効果を促進し、興味の維持が困難
- 現在の授業時間数で、英語教育の効果を出すことは困難
- 授業時数を拡大して、コミュニケーション中心の様々な学習活動を通じた楽しい授業の必要性
- 農山漁村と疎外階層のための英語教育機会の格差解消
- 中学校英語教育との連携に必要な授業時数の確保

ここから読み取れることは、韓国が小学校英語教育の拡充を図る際に重視していたのは、国際競争力、英語学習時間数の重要性、コミュニケーション中心の多様な英語活動の必要性、格差の解消、小中の連携などの要素であった点である。

## 4. 韓国の公立小学校における英語授業例の考察

### 1) 韓国における英語授業視察の概要

以上のような韓国の小学校英語教育政策の特徴、特に日本と比較した場合の視点も踏まえつつ、次には1つの事例研究として、韓国の公立小学校中学年の英語の授業分析を行いたい。これは主として、視察で記録した動画や配布された授業資料および校長や英語教員とのインタビュー結果などに基づくこととする。

まず、筆者による視察の概要は以下の通りである。

- 視察日 : 2016年9月9日(金)
- 学校名 : Chipyung Elementary School (光州広域市の公立小学校)
- 学級名 : 4学年1組
- 組人数 : 24人(4名×6グループに座席を配置)
- 指導者 : 韓国人の英語専科教員1人
- テーマ : “Can I come in?” < Unit 8 >
- 指導法 : “Interaction-based English Teaching”
- 授業時間 : 40分(ほぼ全体をビデオ収録)

Chipyung Elementary Schoolは、校長とのインタビュー結果に基づくと、韓国における普通レベルの公立小学校であり、特別に英語ができる学校ではないとのことであった。また、組人数の24人は日本の一般的な公立小学校からするとやや少ないように思えるが、韓国では標準的なクラスサイズとのことであった。また、英語教員とのインタビュー結果から、本授業の指導をし

た韓国人の英語専科教員について触れておきたい。指導者は、英語教育学で博士号 PhD を取得しており、本授業のような小学校英語の実践だけでなく、理論に基づく学会発表も行っているとのことであった。専門はコミュニケーションなクラスでの文法の自然な習得で、本授業でもその視点を一部取り入れていた。他にも、小学校英語に関わる様々な指導法の知識を持っており、次項で述べる多重知能理論や、最新の英語教育学の理論である CLIL（内容言語統合型学習）などについても熟知していた。また、Master Teacher として、小学校現職教員の英語指導研修にも携わっており、理論と実践の両方に十分な経験を有する人物である。

## 2) 理論的背景

ここでは実際の授業分析を行う前に、本授業の理論的背景の1つ多重知能理論について触れておきたい。Gardner (1993; 2006) は、心理学的な見地から、人間の知能が伝統的に IQ と呼ばれる物差で測られることが多かったことに対して批判し、その知能は「読み書き」と「計算」の2つのみに限定されるものではないと主張した。すなわち、人間の能力は、従来考えられていたよりもっと複雑なものであるとし、「多重知能理論」(Multiple Intelligences Theory) を提唱したのである。Gardner (1999) によれば、人間は誰もが生まれつき少なくとも8つの異なる知能（言語的、論理・数学的、視覚・空間的、身体運動的、音楽的、対人的、内省的、博物的）を持っているとされている（表1）。

表1 多重知能の種類と概要

知能の種類	知能の概要
①言語的	話し言葉でも書き言葉でも有効に使用できる能力（言葉で他人と上手くコミュニケーションできる能力）、情報を記憶したり言葉で他人を説得したりできる能力、言語を習得する能力、言葉で物事を考えていく能力。
②論理・数学的	問題に対し原因や結果を論理的に分析する能力、数字や量を効果的に操作できる能力、科学的な思考方法で問題解決していける能力。
③視覚・空間的	空間の大小にかかわらずそのパターンを正確に認識し処理する能力、物事に対して視覚的なイメージを持ちそれを別の形で表現できる能力。
④身体運動的	身体全体や身体部位（手、足、口など）を使って考えや感情を自己表現できる能力（身体を用いてコミュニケーションがとれる能力）、問題解決や情報処理のため身体を有効に動かせる能力。
⑤音楽的	音楽の演奏や作詞・作曲をする能力、リズム・メロディ・ピッチなどの音声的刺激のパターンを認識し創造できる能力。
⑥対人的	他人の気分・感情・動機・意思などを理解した上で他人と上手にコミュニケーションできる能力、他人との相互作用を通して問題解決していける能力。
⑦内省的	他人とは異なる自分自身の個性を把握する能力、自分の長所や短所を知った上で上手く活用したり自己統制したりできる能力。
⑧博物的	自分たちの自然環境に存在する動植物や鉱物の種類を認識したり分類したりする能力、それに関連して車やスニーカーといった文化的な人工物を識別する能力。

(Gardner (1993 ; 1999) より二五が翻訳および作成)

それぞれの知能は個人によって強弱の違いがあるため、多重知能理論を教育の分野に適用するならば、多様な知能を生かした形の個性に根ざす教育が個々の学習者にとって最も効果的ということになる。また、8つの知能の利用は、コミュニケーション能力育成を図る際に、学習者の言語的知能に依存しがちな英語教育への反省ともなる。もちろん、英語の授業は言語学習の場であるから、けっして言語の役割を軽視しようというものではない。しかしながら、全ての学習者が言語の使用のみで学習成果を上げられるわけではないと考える。1クラスに30～40人もいれば、体を動かすこと、音楽やリズム、視覚的な手段、数字を操作すること、他人と関わること、個人での作業、自然環境との関連などによって学びやすい学習者もいるであろう。日本の小学校においても、こういった個人差にもっと着目し、学習者の多様性(=多重知能)を前提とした「個性重視」の英語指導法を提案すべきであろう。

### 3) 授業分析

上記の視察の概要で示した通り、本授業は小学校4学年24名が対象で、韓国の小学校用検定教科書Unit 8 “Can I come in?”をテーマとして、主に“Interaction-based English Teaching”、すなわち、指導者と児童との英語による口頭でのやり取りを中心としながら教えられたものである。本授業についての目的、本単元で習得すべき語彙、コミュニケーションのためのキーセンテンスは表2の通りである。ここで児童は、英語で許可を求める表現を聞き取ることができ、実際にも英語で許可を求めることができ、様々な活動に協同的に参加することが要求されている。同時に、動作や許可に関わる語彙、許可に関する応答文を習得することが目指されている。

表2 授業目的、語彙および目標文

Objectives	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Students are able to listen to the expressions about asking for permission.</li> <li>・ Students are able to ask for permission.</li> <li>・ Students are able to participate in activities cooperatively.</li> </ul>
Vocabulary	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ come, touch, play, sit, go, ball, home, piano</li> </ul>
Communicative functions	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Asking for permission: Can I ~? /Yes, you can. /No, you can't.</li> </ul>

(Master Teacher, Kim Donggun の英語授業資料より作成)

続いて本授業の考察は、主に撮影した40分間の授業動画に基づいて、英語使用、4技能、オーセンティックさ、コミュニケーション、文法の導入、個性を生かした指導としての多重知能の各視点から行う。なお、( )内の数字は該当の活動が開始した時間(分および秒)を示している。

第1に、授業全体を通して、英語使用の視点から指導者と学習者の双方について考察を行う。指導者の方は、All Englishで行っており、指示、発語での発問、児童とのやり取りなど全て英語で進行していた。また、あまり手加減していないナチュラルスピードの英語を話しており、児童とのインタラクションはとてもテンポよく進めていたのが特徴的である。学習者の方は、クラス全体での活動、グループ内での活動の両方において、ほぼ全て英語のみを使っていた。ただし、学習者の英語使用は、文レベルではなく単語レベルも多く見られた。そのことから、学習者の英語使用は流暢さや英文レベルという点では十分ではない場面も観察で明らかになったものの、40分間、指導者も学習者も韓国語はほぼ使用していないことから、日本の一般的な小学校4年生と比較してみると、少なくとも「聞く」「話す」の面での英語使用ではレベルが高く感じられた。

第2に、4技能の視点からすると、「聞く」「話す」を活動の中心としながらも、「読む」「書く」の活動も授業の随所に取り入れられていることが観察された。指導者とのインタビューにおいても、小学校4年生の早期から4技能のバランスがとれた指導を目指しているとのことであった。例えば、「書く」活動としては、冒頭での日付と曜日の文字指導（1：50、2：30）、touch a ball など新出の表現を書くこと（15：40）、sit here など発音しながら推測の結果を書くこと（19：00）、本日習った表現を2回書くこと（37：50）などがあった。「読む」活動としては、宿題で書いてきたものを2回読むこと（3：10）や、新しいレッスンにて文字を見ながら読むこと（5：00）があった。日本においては、先述の中学生へのアンケート結果で8割は「小学校の英語の授業で英単語を「読む」「書く」機会が欲しかった」と回答していることや、最近になってようやく高学年で「読む」「書く」も一部取り入れられるようになったことを考慮に入れば、韓国の観察した授業では中学年から英語力の総合的な向上のための4技能のバランスを重視しており、ここでも日本が見習うべき点が多くあるように思える。

第3に、オーセンティックさの視点から見ると、指導者が実際のコミュニケーションに使用可能な場面を数多く設定していることが観察された。例えば、実際に教室に入る場面の演出（5：10）、ボールの利用（12：10）、実際に椅子に座る場面（19：20）、キャンディを用意してCan I～？の表現を使用（36：40）等があった。特に、指導者がボールを投げて受け取った児童が英語を話すという場面では、“Who wants to catch the ball?” “Can I throw the ball?” “Can I catch the ball?” “Can you kick the ball?”（サッカーの得意な子へ）など、指導者が場面に即して多様な英語表現を用いていた。ここでは、実際にボールを使いながら、バリエーション豊かな英語表現を児童が自然に習得していくことが意図されていると言える。また、キャンディの場面では、児童がキャンディをもらうためにどうしても英語を話さないといけないという、会話の必然性が設定されていた。以上のことから、本授業では無理に作った会話場面ではなく、形式よりも意味内容を重視した英語指導が行われていることが分かった。

第4に、コミュニケーションの視点から考察すると、指導者が本授業に意識的に取り入れている“Interaction-based English Teaching”の英語教授法とも密接に関連しているが、児童とのインタラクションが多い（6：10）のが本授業の大きな特徴の1つと言える。授業のはじめ頃の場面での児童とのインタラクションの後には、クラスで話した内容の復習・共有をし、それから児童が教室の中を動き回ってのペアでの活動（7：15）へとつながっていた。もう1つ重要な点としては、本時の目標の英文を型どおりにコミュニケーションするとどまらず、話した人や内容についてグループ内（8：30）やクラス全体（9：40）で報告しあっていることである。例えば、報告の際に必要とされる“I met～”や“He said～”などの表現を児童が積極的に用いることにより、さらに応用的場面への適用が可能なように意図されていた。また、“Do you want to go home?”などの指導者による問いかけにより応用的な会話も数多くされていることが観察された。別の場面として、新出表現の紹介のところでは、単に繰り返すだけでなく、“Do you want to play the piano?・・six years・・”のような自由な会話も入れて授業が進行していた（20：30）。日本においては、特に小学校4年生の段階では難しいかもしれないが、コミュニケーションが目標文の型通りのみで終わると単調でつまらないと感じる児童も多いので、もっとコミュニケーションへの興味・関心を高めるためにも韓国の本時の授業のようにプラスaの自由な会話を多く取り入れることも重要ではないかと考える。

第5に、文法の導入の視点で分析すると、本授業での児童への問いかけ等において、指導者が意図的に過去形を多用していた。例えば、“I came in.”（5：35）、“Did you meet your friends?”（8：00）、“Did you say that?”（15：00）、“Did you guess?”（18：15）、“What did you see/know?” “I knew～”（29：35）、“What did you hear?”（30：15）などである。しかしながら、指導者は文

法自体の解説は行っておらず、コミュニケーション活動の中で児童が自然と過去形に気付くような手法で取り入れているのが特徴的であろう。小学校4年生の段階で文法の説明を先に行いその定着まで図ることは難しいかもしれないが、この段階でもコミュニケーション活動の中で過去形を多用して児童に気づかせておくことは、小学校高学年や中学校での文法の定着につなげる意味でも効果的ではないかと思われる。

そして第6には、個性を生かした指導としての多重知能の視点から、本授業の考察を行ってみたい。視察した動画による授業分析の結果、人間誰もが持っていると言われる8つの多重知能のうち、少なくとも6つが本授業に効果的に活用されていた(表3)。

表3 授業で活用された多重知能と本時の英語での活動

知能	英語での活動
視覚・空間的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イラストを英語で表現 (16:25)</li> <li>・イラストを見ながら英語で質問 (26:20) What's this? Who is this?・・・</li> <li>・アニメ映像を視聴し (27:45)、2回目はせりふの文の発音 (28:45)</li> </ul>
身体運動的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新出表現に関する (go home・・・) アクションをする (21:45)</li> <li>・友達のアクションを見て英語で言う (34:50) + Yes/No</li> </ul>
音楽的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新出表現をチャンツ、リズムで学ぶ (23:10)</li> <li>・立って自然にリズムを取る子どもあり (25:25)</li> </ul>
論理・数学的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テキストを見て内容について推測 (17:00) I guess～</li> <li>・アニメを見てせりふを記憶・理解し、せりふを順序だてて再現する (29:35) →クラス全体でのせりふの再現 (30:15)</li> </ul>
対人的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ外の人とした会話をグループ内で報告 (8:20)</li> <li>・推測したことをグループで話し合い (17:25)</li> <li>・イラストについてグループで話し合い (27:00)</li> <li>・アニメ映像についてグループで話し合い (29:35)</li> <li>・I can speak～でグループ活動 (32:45)</li> <li>・アクションを英語で記述するグループ活動 (35:10)</li> </ul>
内省的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の内容 (宿題) を振り返りながら個人で読む (3:10)</li> <li>・本時の内容を振り返りながら個人で書く (37:50)</li> </ul>

(40分の授業動画の分析により二五が作成)

表3から読み取れることは、多様な子どもの個性が本英語授業の中で生かせるように、英語活動が工夫されている点である。授業観察をすると、視覚・空間的知能に秀でた児童は、イラストや漫画を活用している場面で生き生きと英語活動に取り組んでいた。身体運動的知能が強い子どもは、英語学習をする際に体全体を利用するアクションやジェスチャーを積極的に行い、音楽的知能の強い子どもは英語の歌やチャンツ、リズムで学ぶことを好んで行っており、中には誰にも指示されていないのに自然に立ち上がって英語に合わせてリズムをとる子どももいた。また、対人的知能に秀でた学習者は、英語でのグループ活動に積極的に参加し、逆に内省的知能に秀でた学習者は個人での「読む」「書く」の活動を好んで行っていた。以上のように、6つの多重知能をバランスよく英語活動に盛り込むことにより、様々な能力を持つ子どもが少なくとも授業の1

場面では活躍できる機会が与えられ、それぞれの子どもの個性を生かした効果的な英語学習ができていたのである。

## 5. おわりに

本研究では、日本や韓国における小学校英語教育政策に触れながら、1つの事例研究として、2016年9月、光州広域市の公立小学校にて4学年の“Can I come in?”をテーマに許可を求める表現を、インタラクションを中心として協同的な活動により学習した授業を観察した。そして、ビデオ収録した40分授業を、主に英語使用（指導者と学習者の両面）、4技能、オーセンティックさ、コミュニケーション活動、文法の導入、個性を生かした指導としての多重知能の視点および指導者の特質から分析した。特に、韓国の必修化に伴う小学校英語教育政策と授業分析の結果より、今後日本においても本格化してくると予想される小学校中学年に関する英語学習（一部、教育政策も含む）で、参考にできる点を以下に列挙して本稿のまとめとしたい。

- 韓国では必修化に向けて充実した現職教員に対する研修や英語教員養成課程の大胆なカリキュラム改革を行っている点。
- 子どもの個性を生かし、多様な知能を持つ子どもに活躍の場を与えている点。
- 「聞く」「話す」を中心としながらも簡単な「読む」「書く」を導入している点。
- オーセンティックな題材を用いると共に、会話の必要性が生まれる場面を数多く作り出している点。
- 視覚や身体も利用しながら全て英語で進めている点。
- 英語指導者が素人ではなく、教授法などにも専門的知識を持っている点。

なお、本研究は韓国の公立小学校の1事例のみを扱っているものであるから、これが韓国の小学校英語の授業の典型例であるというように一般化するつもりではない。しかしながら、本事例より、児童が英語だけを使用することはもちろん、しっかりした研修を経た英語指導者が英語のみを用いて、子どもの個性を生かした多重知能の身体や視覚も豊富に生かしつつ、4技能をバランスよく指導している点は、日本の小学校中学年の英語活動に大きな示唆を与えるのではないかと考えるのである。

## 引用文献及び参考資料等

- Chipyung Elementary School（韓国光州広域市）の校長および英語専科教員とのインタビュー（2016年9月9日実施）。
- Gardner, H. (1993). *Multiple intelligences : The theory in practice*. New York : Basic Books.
- Gardner, H. (1999). *Intelligence reframed : Multiple intelligences for the 21st century*. New York : Basic Books.
- Gardner, H. (2006). *Multiple intelligences : New Horizons*. New York : Basic Books.
- 河合忠仁 (2004). 『韓国の英語教育政策－日本の英語教育政策の問題点を探る－』大阪：関西大学出版部。
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 (2022). 『2021 Report on Test Takers Worldwide : TOEIC® Listening & Reading Test』  
<https://www.iibc-global.org/library/default/iibc/press/2022/p194/pdf/Worldwide2021.pdf>
- Master Teacher, Kim Donggun の小学校4年生用英語授業資料（2016年9月9日配布）。
- Master Teacher, Kim Donggun の小学校4年生英語授業動画（2016年9月9日撮影）。
- 文部科学省 (2005). 「韓国における小学校英語教育の現状と課題」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo\\_3/015/siryu/05120501/006.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_3/015/siryu/05120501/006.htm)
- 文部科学省 (2013). 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画－2013年12月公示」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/25/12/\\_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458\\_01\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf)

文部科学省 (2014). 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm)

ソウル特別市教育研究情報院 (2009). 「2008 年改正小学校英語科の教育課程」パンフレット (pp. 4- 5).

山本元子 (2015). 「1 韓国」大谷泰照他編. 『国際的にみた外国語教員の養成』東京：東信堂.

